

と言ふ意味にも使ひます。「河袋に行けば云云」「カブグロまで樹を出す」などの語例、内が少しく
廣く一方に出口のある澤目、何れも口があつて水が流れ出してゐる地形の名のやうであります。

二〇五 長 根

ナガネは長根と書いてゐて、八幡長根・下長根・小次郎長根・仁佐瀬長根・等の地名もあつて、
里の長く續いた丘陵を言ひ、村を境する分水丘とも言ふ可き地形に名づけられてあるやうです。兩
村を境する分水界のこと、低い山續き、矢張り「ナガミネ」に關聯する名義でありませうか。ネの
語源はヤネ（屋根）・ミネ（峯）・クネ（生桓）などのネを想像して見ると面白いと思ひます。

二〇六 舟の名のつく所

山中の而も深山に舟越とか舟原の地名が澤についてゐることがあります。地形の説明は出來ませ
んが、フネの意味も判然しません。但し山中の往來筋、他の地方と山民が交通するため往來した筋
にのみ斯うした名稱が遺存してゐるのではないかと考へられます。

昔は各戸に獨木舟即ちクリブネ、刻りぬき舟がありましたから、必ずしも山間の交通と關係ある

ものでもないかも知れません。

二〇七 キ ギ シ

キシの語は際きはの意味に多く使はれて、盛岡の近くには淺岸村あさぎしや山岸村やまぎしがありますが、山の麓の方
を里から言ふ場合には常に「彼の山岸やまぎしさ行けば」とか山岸は云云と言つてゐて、間に距離がある時
の用語であります。隨て「根もと」とか根際をこちらから言ふ時は、「あの根ね、キシ」と言つて用語も
自然根岸となるのであります。「右者駒ヶ嶽御山唯ニ登兼候御場所故木岸下夕通相廻申候」文化年中。
「木岸下夕通きぎししたとらうり」の木岸は解せない用語でありますが、文意から推して、駒ヶ嶽の踏査は登られない
ので、其下を見て廻つた意味で、木岸の木は書誤りでないとすれば、「キギシ」と訓まざるを得な
く、隨つて勿論山麓の意味の根岸とも異なり、遙かに駒ヶ嶽を眺めながら中腹の林中から見て廻つ
た意味でありませう。すると山根は「根岸」で、嶽を遙かに見上げる位置の中腹は「キギシ」で、
高山の喬木帯からその上の灌木帯を見る時、其喬木林中は木岸であつたとも考へられます。

二〇八 ヒ ド ロ

ヒドロとは湿地など、沮洳地のことであります。御明神村に「ヒドロ谷地」地の名があります。昔龍川の流れた跡で、即ち舊河床であります。今は大部分水田になつてゐますが、猶ほ所々に水だまりや、湿地があり、一般に低くなつてゐますが、山中ではありません。信州のヒドロと比較されます。

二〇九 ザ ヲ タ リ

岩手郡御所村大字繫字湯の澤の出口にあります。矢張り澤の渡りかと思はれます。

二一〇 マ タ

山中の澤に多く見える名で、北のマタ・東のマタ・中のマタ・二つマタなどで、多くは又の字を當ててゐますが、分岐した澤の意であります。

鶯宿川の上流にマツタの澤名のあるのは語意不明であります。

二一一 マ ン プ

志戸前山の砥石を掘る岩の斜面などに「御前ゴゼンマンブ」などと稱してゐる所から見れば、最良の石のことかとも思はれますが、鑛山にもマンブの語があつて鑛脈の意であつたと記憶してゐます。御前マンブとは殿様御用の砥石脈との意味であります。崖をハブと言ふことにも関係がありませうか。鑛脈炭脈などは更に「ヒ」とも言つてゐます。「ヒがある」「ヒが続いてゐる」など言ひます。

二一二 イ ヲ ナ メ

岩名目又は岩ノ目と書いてありますが、語意が分りません。紫波郡山王海、岩手郡切留及安庭にあります。或は隠里と関係がありますまいか。山中のタイ地に見えてゐます。山中の難解の地名の一つであります。

二二三 ガ ン ジ ャ

ガンジャの地名も郡内に四五あります。蟹澤の字を宛ててゐますが、別の意味があらうと思ひます。此地ではタニウツギをガンザと言つてゐますけれども、是とは別かと思ひます。地形的の説明も山の中と言ふよりは里近い方で、勿論水邊とは関係があるやうであります。

第十一 山と民俗

〔一〕

二二四 山と村人

村山に太い樹が無いに就いては、こんな話が傳へられてゐます。昔は、殿様が御城を築く度毎に役人が村々を廻つて、目星しい樹を伐つて持つて行つたので大木は残つてゐないと申すのです。またこんな話があります。或所の人は自分の山の澤にあつた大木をこつそり隠して役人に告げなかつたとも言ひます。それが如何なつたかの後日譚は勿論ありません。

又御神木としてあつた樹を伐つたために罰が當つた話や、切つた木口から血が出た話しや、知らずには伐つた樹は山の神様のついでゐる木であつて忽ち卒倒半身不随となつたなど、山に關した傳承も仲々に多量あります。

山の雪が早く消えると、春雪が降るといふことや、山の山樺が若葉を出すと麻の種を蒔くことな

ど、山の雪の消え具合で田植を始める等、山を標準に季節を辨別し、仕事を進めて來てゐる山村の人生は、それは決して短い郷土生活では創められない民俗なのであります。

一足の下駄にしてもが、下駄職に依つて製作販賣されるやうになつたのは、歴史は極めて新らしく、其以前の又は都市以外で使用してゐた年代は遙かに永く、遙かに古いことを注意されるし、表面三つ穴の極めて簡単な二つの齒でよりあり得ない代物でも、立派な年代を保つ土俗品であり、近世經濟生活の必需品で、嚴然たる存在なることも、いやが應でも承認せねばなりません。

野原から山から刈込まれる雑草は、聽ては冬の雪上を厩から引き出されて、田に畑に唯一の肥料として施されて來たことも、春の山から、田や苗代や畑に若葉を取つて來て敷く其カツキ（刈敷）の綠肥も、物理や化學の發達した今日と合考して見て、矢張り農民の歴史を今一度吟味して見るの必要と、記録以外の立派な貴重な沿革を識るために、民間傳承の世界への勇敢な突撃を敢てする同志を、全國の郷土學徒に歴史家の人々に願つて見たいと思ひます。

二二五 嶽の神様

雫石地方の北にある綱張温泉は、入湯危険のため綱を張つたと書物に書いてあるのは嘘で、雫石

地方住民の信仰からして藩では止むなく入浴を禁止したのであります。古來から雫石地方の住民が嶽の神を信仰してゐますので、この温泉に硫黄採取や明礬採取や或は入浴のため小舎懸したりして其土地を妄りに荒すと、忽ち神罰に依つて大暴風雨襲來して不作兇作を來すと固く信じてゐたから、藩に入湯願や採取願のある度に擧つて反對し抗議を申立ててゐるのであります。藩でもさうした願出のある度毎に雫石地方の農民に諮つてゐますが、後には雫石地方の願を入れて、人の觸れないうやうに綱を張つたと言ひます。寛政九年の抗議書を寫して見ます。

乍恐御答申上候事

雫石通御代官所長山村之内、志のか森村之上、岩鷲山續湯又と申處ニ先年より出湯御座候を、此度盛岡表ニ而、至而名湯之旨見立候者御座候而、右湯諸人諸病爲療治之、湯小舎等相建、湯守相成申度旨、御上様江願上、隨而明礬契方草分御證文願上候而、通路往來之儀は、鶺鴒より直道に而、山元迄馬駕籠順路致候様ニ切開き、右湯小舎道普請爲入料、明礬契方三ヶ年中頂戴仕度旨願上候ニ付、御村差支有無申上候様被仰付候、隨而奉申上候、明礬契方之儀は、去辰八月も御沙汰御座候而、御所差支之儀奉申上候通り、湯之又と申處、岩鷲山續故、古來より硫黄盜取候者など參候節に御座候節に御座候哉、悉く風雨致候而、御吟味方度々、被仰付候程之儀に

御座候得者、右場所にて明礬は勿論、湯小舎にても被仰付被下置候而者、御所之者差支にも無御座、一統之差支相成可申と奉存候間、右願被仰付候儀は御免被下置乍恐奉願上候 以上。

寛政九年己ノ七月

雫石通總御百姓共

- 南畑村老名頭 十 助
- 繫村 同 伊 兵 衛
- 上野村 同 久 左 工 門
- 長山村 同 久 右 工 門
- 雫石村 同 三 七
- 南畑村肝入 久 兵 衛
- 繫村 同 與 左 衛 門
- 上野村 同 作 左 衛 門
- 長山村 同 作 右 衛 門
- 雫石村 同 重 左 衛 門

(雫石代官)

赤澤儀左衛門様

四戸左右司様

このやうに山嶽信仰は、山麓の住民に熱烈に把持されて來てゐますから、藩でも亦入湯を禁じ綱

をも張るに至つたであります。

一方農民が嶽の神の神爲として風雨を恐怖した信仰は、その風雨が、その土地からして凶相の位置にある山嶽に關係してゐるからであります。山男話のやうな巨人説話と比較して見て興味があります。嶽には農民を守護して下さる神様が鎮座してあると考へ、其神威と神域を汚すことを恐怖してゐた民俗は、斯ふいふ所にも表現されてゐます。嶽に登つて雨請ひをしたり、風害や虫害を驅除して加護して下さいと信じて居ます。

二一六 岩手山と片目の鬼

昔オヤマには澤山の鬼が棲んでゐました。それを田村將軍が退治して一人の片目の鬼だけを活かし、権現様の小使と致しました。今日でもこの鬼は岩手山の鬼ヶ城にゐて、其所の洞穴に棲んでゐると言ひます。毎年山があくと、登山客がオヤマを汚くするので、この片目の鬼が路を掃除してゐるさうであります。だから毎年登つて見てもオヤマの路は塵も留めず清淨であるとのことでもあります。オヤマガケ（登山）をする人で心に悪心を懐くとか、放火でもしたやうな人は権現様に嫌はれて登ることが出来ず途中から引返したと言ひます。一種の高山病のことであつたやうです。之をウケイ

レナイと言ひ、又受け入れて呉れると足元が軽く且つ片目の鬼は権現様の意を受けて出迎えて呉れるから容易に登れるものと言はれて來てゐます。

オヤマの権現様は常に山麓の農民の福利のために色々御盡し下さるとの事で、農村の信仰は頗る深いものがあります。其故か登山して頂いて來た御守札や何かは、オヤマから取つて來た松の枝と共に虫除け豊年祈禱として田や畑に立てられてあります。

岩手山^{かやま}にはその昔惡鬼共許りゐて良民を苦めてゐたさうで、其頃は常に曇つてゐたので、奥州霧山嶽と申したさうです。又古住時々岩の上に大鷲が現はれたので岩鷲山とも稱したと傳へます。田村將軍に關した説話が澤山あります。

二一七 三山説話

岩手山は典型的な重複火山で、奥の富士と謂はれてゐる程の秀麗な高山であります。お隣りのお姫ヶ嶽と人も羨むやうな結婚をしたさうですが、後になつて御姫ヶ嶽を嫌ひ之を離縁致しました。その後釜に早池峯が娶られて來たので三山は三角關係の戀愛をしたと言ふ有名な傳説があります。岩手山に登つたものはその年は姫神に登らず、姫神登山客は岩手山に登らないと云つた習俗があつ

たさうです。

二一八 御駒ヶ嶽の話

陸羽の分水山脈は又岩手郡と仙北郡の境界でもあります。同時に雫石地方と角館地方をも境して居ります。

この分水山脈の上に雄然と峙立してゐる高い山は駒ヶ嶽であります。雫石地方では「お駒」又は「お駒ヶ嶽」と言つてゐます。

厚い雪が春になると暖かい陽熱で解けて、嶽も峯も雪の消え痕が斑な模様を呈して來ます。恰も駒の前身の模様が駒ヶ岳に現れて來るのはその頃であります。斯の駒の形をした雪の消え跡の説話が嶽の名となつてゐます。

昔、出羽の國から陸奥の國へ、駒を曳き踏すことになつて、兩國の境であるこの山に差しかかる時、駒が登れてしまつたと言ひます。陸奥の方へは前身前脚二本と首頭を出し、出羽には後脚と尻を向けてゐるので、この駒は常に陸奥の方の草を食ひ秋田の方に排便してゐるから、陸奥には不作が多く、出羽は豊作となるのだとの傳説であります。

南部の方へは頭を向けて養分を取り、秋田を肥してゐるとの説明は、南部人の搾取されてゆく處世上の愚鈍さを諷刺した譬句でもありませんか。三月下りの西の嶽に、駒の前身の形した雪消えの趾は、人情の機微を言ひ表してゐる所に面白さを感じさせます。西の國から東の國へ踏え兼ねた話は兩者の民俗を多少でも語つてゐる事でありませう。

二一九 兩國が婚姻絶えた話

陸羽の國境中央分水山脈を越して、東の國と西の國を繋ぐに國見峠（今仙岩峠と云）があります。

昔、西の國秋田から、東の國へ嫁入つた女がありました。機を織るために秋田へ歸らうとこの峠に差縣ると、餘り咽喉が乾いたので、傍の沼に寄つて水を飲んだのは魔のさした所以。其儘其所の主と同棲して主となつたさうです。その女はこの地の風習である里歸りして機を織る時には是非持參する梭を持つてゐたさうであります。以來自分も里の實家に歸れなかつたのを残念に思ひ、この峠を梭を持つて踰えると、必ず禍があるので、東の國の岩手と西の國とは婚姻が絶え、今日でも兩間の婚姻が無いと傳へてゐます。

雫石地方と角館地方とは峠一つ距てた許りの土地であるにも拘らず、殆ど兩者の婚姻が結ばれて

ゐなかつたのは事實であります。山が取りもつこの不思議な事實の裏面には、猶ほ深い信仰上のものが動いてゐるのでありませう。歴史的には關係があつて、雫石に發祥した戸澤氏の如きは、南部氏との戦さに敗れて角館に退き、後には新庄八萬石の諸侯となり今日の戸澤子爵家の祖をなしてゐるのでありますが、交渉深かる可き兩者の地方の隔離には、もつと深い事情が伏在してゐることです。

國見峠の分水嶺の中程に今や旅人の憩ふ場所となつてゐる椈瀉ひんかたは、この神祕な傳説を妊んでゐる山中湖であります。この湖水には一個の浮嶋が浮動してゐて、通交する旅人の一の慰藉ともなつてゐます。

二二〇 苗取爺と西の嶽

岩手郡の西方を奥羽の分水山脈が走つてゐます。駒ヶ嶽續きの峯に春になると「苗取爺なにとぢい」と言ふのが現れて來ます。

毎年田植近くなると、其場所は雪が消えて、恰も老翁が腰を曲げて苗を取つてゐる姿によく似た所が出て來ます。

「苗取爺が見え出した、田植の仕度してもよす」

「苗取爺は苗取してら、俺も田植すべあ」

雫石地方から駒ヶ嶽方面の雪の消えた跡の形を遠望して斯く呼んでゐるのであります。昔は嶽の神様でもあらう眞實に嶽の上の方にも田があつて里のやうに田植があつたものと信じられ、岩手山にも駒ヶ嶽にも田の形だと言ふ所があり、駒ヶ嶽の苗取爺の奥には「田代たしろ」と言ふ所もあると言はれてゐます。

陸羽分水山脈の厚い雪が解けて、西の嶽に駒形が現れたり苗取爺が現れ出して來ると、里の仕事はそれに依つて、時季を辨へ作業をそれからそれへと續けてゆくのであります。

二二一 國見峠と貝吹嶽の話

戸澤公は峠の頂きに停つて、故國雫石を見とれてゐました。雫石町とその居城は猶ほ餘焰をあげて燃えてゐます。従ふもの僅かに數十人、皆聲もなく惡闘苦戦のその姿を見せて悲壯な戦のあとを振返つて見てゐました。勢ひ誇つた卑怯な三戸勢は、到るところ掠奪を擅にしてゐるのであらう、數代相恩の恵を享けた、民、百姓輩は故主を慕つて嗚咽啼泣しても居やうか。陣貝を持つた一人は

主命に依つて、傍らの丘陵に駆け上り、ヲウノ、陰陽非常の合圖の陣貝が吹き鳴されて行きました。

此時戸澤公の吹かせた陣貝は、遙か遠くの雫石まで響いたと傳へます。陣貝を吹いた丘は國見峠の貝吹嶽、國見峠は戸澤公の故國を偲んで停たせられたからの名と傳へます。

斯うして戸澤氏は南部氏との合戦に敗れて雫石を没落し、出羽角館に本居を構えることになつたと傳へてあります。國見も貝吹くも實際は山嶽の信仰と関係がありませんか。

二二二 晝休みは麻蒔きの日から

春の八十八夜には山のブナ林が色づんで來ます。それを標準に農家では麻を蒔きます。

「山のブナ青くなつた蒔蒔いてもよい」

「八十八夜來たからナ」

こんな會話が取交されて、段々春の作業は多忙になつて來ます。八十八夜が來ると麻糸の種を蒔き、麻が蒔かれると其日から晝の休みが始まります。そして秋の二百十日も近づいて來た頃この麻が畠から引かれ、その麻引きが終ると同時に晝食後の休みがなくなる習俗でありました。

雪の消え方や、樹木の芽に依つて農民が自然その作業の時季を辨へ、それらの仕事を處理して來てゐるのであります。バラの花の咲く頃は魚類が川を上つて來ると言ひ、油の花梗が立てば鰻が下り鮭が來ることなども、季節と生物の關係を知る上に大切なことかと思はれます。二月にはネムタ鳥がわたり、秋には渡り鳥が歸つて行くのも山の國で郷土生活に永く鍛へられた民俗に依つてのみ味うべき多くの事柄を藏してゐるのであります。

二二三 権現様もタマゲル話

春の農民の活動は實に目まぐるしい忙しさで、またたく間に田植を迎へねばなりません。今まで黒かつた水田は忽ち一面に水を湛へた水の世界となり、忽ちにした苗を植えた青田と化すので、オヤマの権現様（鬼ども）も人間の精力にタマゲルのなさうであります。

「ハハハ人間共も仲々やり居るわい」と哄笑を漏すのであります。

嚴然と里の一方に鎮座し、山麓の住民から尊敬と信頼を得て、太古から附近を支配宰領して來てゐる事は、其土地の氣流と地勢と生物に強く影響し、それが永い間の自然律に依つて人々の胸に強

く印象してゐること、山の精と人生は深く掘下げる程その関係を増大して來てゐることが考へられます。山から來臨する神様をもつと近く眺めたいと思ひます。

二二四 篠崎八郎の話

昔、奥州の霧山嶽には澤山の鬼がゐて、ために山は常に曇り勝でありました。田村將軍は勅命を受けて下向し中野郷大宮(磐石の古名と云)に陣を取り、霧山嶽(岩手山)に攻め上りました。

其頃篠崎村(岩手郡西山村大字西根字篠崎)に篠崎八郎と言ふ狩人またいがありましたが、將軍の御先立を承り、岩手山に路を切り開いて案内を致しました。その時路を切り開きに用ゐた鉞は八尺あつたと言ひ、今も篠崎の山の神社に奉納されてあると言ふ人もあります。又、篠崎八郎の手玉石といふ大きな丸い石も同神社の境内に残つてゐます。是も巨人説話の一つでありませう。同神社には篠崎八郎の碑が、明治になつてから建てられています。

篠崎八郎と同じく將軍の案内役に立つた人で篠木五郎と言つた人があり、岩手郡瀧澤村大字篠木の人であつたと言ひます。

鬼賊の頭目大武丸が隠れたと稱する岸窟は篠崎の奥上流にあります。

二二五 鬼苺と権現様

岩手山の裾野から雫石盆地の一方にかけて廣茫な野原が展けてゐます。今は有名な小岩井農場が開かれてゐますが、もとはこの地方の人々の畑が澤山あつたものです。春になると藪や雑草やのもダワラに野火を入れて、其所に新らしく畑を開墾致します。そして青引豆や蕎麥を蒔くのであります。

新しい畑はアラギであつて四五年蒔き続けると段々作物は收穫を減じますから、其所を捨てて又新らしく開墾致します。捨てた畑は「アラシ畑」ばたけで忽ちトヅラ・イチゴ・ヤナギ・カヤが勢ひよく蔓はびります。

この畑に生えるサイチゴを私達の地方では鬼イチゴと申してゐますが、この苺が荒畑一面に繁茂してゐる有様は美事なものでありました。この苺は岩手山の下にだけ生へると言ふ傳説を傳えています。理由は分りませんがこの苺に就いては岩手山の権現様は、

「俺の目のとどく範囲内にだけこの苺を生へさせる」

と申してゐるので他の地方には無いと言はれてゐます。このオニイチゴは従つて岩手山の見えない

澤目とか日陰にはないと信じられてゐます。殊に土を掻き廻したやうな土堤とか線路のあととか畑の後を喜んで繁殖致しますので、群生してゐますが、是をイチゴバラと言つてゐます。苺原のことでありませう。

山中の澤目にあるイチゴは略似てゐますが、幹が少しく黝づんでゐることと、刺が白くて細く且つ多毛である點などが異なります。是をば「熊イチゴ」と申して區別してあります。

又「ノダリ苺」と言ふ蔓になつて地を這ふのがあります。又の名を土苺とも言つてゐます。ノダリは這ひ歩くことなのであります。この苺にも少しく刺があります。以上三種は實の赤い苺であります。

猶ほ山の斜面に生へて黄い實のなる「サイチゴ」と言ふのがあつて苺中で最も早く五六月に熟します。サイチゴは澤苺でもありませんか。

二二二六 山男八郎太郎のこと

盛岡の西部、雫石盆地の東隅に七ツ森といふ丘陵性の山があります。其主峯を「オホ森」と言ひ大森・生ひ森等と書いてあります。

昔、八の太郎は鹿角から追はれて雫石に來た時分、この盆地を見て屈竟の場所と歡び、雫石川を堰止めて一面の沼と化し己が棲所に致さうと、早速大森の山を背負ひにかかりました。栗谷川山と繫山との間を塞がうと致しました處岩手山の權現様に發見され、忽ち壯烈な神戦が展開されました。權現様は麓の良民を沼の底に埋める事を大變怒つて旺に火を吐き岩石を投げ飛ばしたので、巨人八の太郎も居たたまらず、秋田に逃げ八郎湯の主となりました。今でも七ツ森の諸所に岩石の現れてゐるのは、その時お山の權現様が投げた石と傳へてゐます。大森には八の太郎の荷繩をかけた趾、その尻の跡、足跡と言ふのがあり、長山村の七ツ田はその煙草の吸がらだと傳へてゐます。八の太郎も亦鹿角の山男と言ひます。

二二二七 九十九澤のこと

岩手郡御所村に九十九澤と書いてツクボザワと言つてゐる一部落があります。その村を流れる川は九十九澤川であります。

鹿角の巨人であつた「八の太郎」はこの澤を堰溜めて自分の棲む沼にしようと計畫して算へて見ると百澤に足りないので中止とも言ひます。

或る人の話では昔殿様が天下様より百澤のある所を御用檜山にすると命令が出たので、九十九澤よりありませんと主張したさうです。

昔、八幡太郎義家が志和から雫石に踰え、安倍貞任を厨川に攻めた時ツクモサンケイと謂ふ武器を立てたので此の名があるとも言ひます。兎に角百に足りない九十九の數に別の意味が含まれてゐることです。

此澤の上流に女助山があつて、西の男助山と相對してゐますが、昔は夫婦の山であつたと傳へてゐます。九十九澤の出口には夫婦石と稱する巨石がありますが詳しい傳説は解りません。

二二八 東根太郎の話

盛岡から南にあつて中央分水山脈から分岐してゐる一つの重疊した山脈があります。前には北上谷を控へ、後には雫石盆地、右には澤内狭谷、此の一帶の山勢は東根山山羣なのであります。

是等の山勢を支配宰領する巨人山男を東根太郎と申すさうです。

それから北の方の群山、葛根田山から八幡平鹿角までを支配宰領する巨人が居ると言ひます。是等の山男達は各自其領有する山があつて之を支配してゐるのださうです。マンダの草鞋を履きマン

ダの蓑を着てゐますので、その捨てた磨り切れ草鞋一つを拾つても、普通人の蓑を四五人分を作るによいと言はれます。昔はこの磨り切れ草鞋を深山で發見することがあつたものだと言ひます。この草鞋から想像しても随分巨大なものであると考へられてゐたさうですが、山男は人間に姿を見せないものださうであります。

東根山の山男と葛根田山の山男とは、正月の或る晩に相談しあつて、其年の農作物の評議をすると言はれます。全く里の人が寢静まつた頃ほひ、一方の山男から「ヤ——居だか——」と聲をかけると「ア——居だ々々」などと答へ、それからこんな風に會話が交換されるさうです。

「今年の世中なちよにすナ」

「先づ當り前でよかべでア」

「ア——可しくただ風は少し出すがア」

「ウン俺も少し吹かせる」

雫石地方から東根山の方角は、逆り風や辰巳風の位置で凶方であり、葛根田山は北風の吹いて來る方であり、逆り風でその凶相の雲の行詰める方角に當るので、共にこの地方の凶位置として恐怖認識されて來たから、右のやうな説話も生じて來たのでありませう。當地方の凶作不作の多くの原

因は、人爲的に非ずして常に自然氣象的變異に起因し、それが多く如上の位置に於ける風などの襲來に依つてゐますので斯うした民俗もあるのでありませう。

二二九 山奥の怪異

雫石川の上流に葛根田川と言ふのがあります、その葛根田川の上流に「楠平」といふ所があつて、其所は昔の戦争の落人が住んでゐたらしく屋敷様の跡があると言ひます。西根村の篠崎といふ村の狩人が、或時楠平で石の地藏様を發見したので、是は勿體ないと思ひ、次にその地藏様を探しに行きました所、全く分らなかつたと言ひます。一つの魔地でありませう。是も同じやうな話ですが、矢張り葛根田谷に「ハノキ」倉と言ふ嶮所があります。其山の陰に金の地藏様があつたのを或人が發見し後日行つて見ると其場所が全く分らなかつたので、何でも金の精であらうと思ひ出した話があります。岩手山は硫黄の産地として全国的に有名でありますが、この硫黄の發見は金山を探したのが最初の目的であつたとも傳へてゐます。葛根田川の水源地方は人蹟未踏の所が多いので、魔地的な説話が多く傳へられてゐるやうであります。

二三〇 大蛇の話

山には奇怪な話が往々ありますが、最も恐怖されてゐるのは大蛇の話でありませう。大蛇は實際ゐると信ぜられてゐる意味には猶ほ幾多の検討を要しますが、忘れかけた時分には又ぞろ出現して人間を驚かしてゐるやうです。そして大蛇が居ると信ぜられてゐる地域も略或る特定の地域のやうであります。

人々の心中に描かれてゐる一つの魔地とも稱すべき地域であります。随つて蛇は神の使徒であり同時に神と信じられてゐる事もまゝあるやうです。奥山に入つたものは大蛇を見て逃げ歸り三日も慄へて寝てゐたと言ふ話や、鬼を呑んでゐる有様を見た話、谷間を横切るを見た話、木の枝をするする渡つてゐたのを見た話、そして一つの部落には必ず大蛇を見たと言ふ主張する老人が四五人は遺存してゐることなど、三年に一度又は十年に一度といふやうに是非人間の目に觸れてゐるものだと思ひて來たこと、穀類を食べると小蛇もまた段々大蛇に化性する話、又ある舊家には時々大蛇が現れると言ふ話、明神様とは蛇のことと信じたり、大木の空洞には大蛇が棲んでゐると信じられたり、人に禍するやうになれば其蛇に落雷して天罰があるものと思はれたり、果ては山に千年・水に千年、

海に千年を経ると龍と化して通力を得るとされた事は佛教臭いが、蛇が魔物であると信じられて来た其奥底には、猶ほ研究考査を要する幾多の問題が含まれてゐるのであります。

更にまた、蛇の口に小石を詰め込んで遊んだ少年が罰で盲目となつた事、矢張蛇をいちめて白痴になつた人、女が山野に晝寝してゐて蛇が〇〇に入つた話、或婦人は蛇の卵を産んだ話、女が蛇の魔性に冒されたと言ふ話も随分多かつたのであります。

執念の深さに於ては敢て蛇にも劣らないと言はれて来た女性も、蛇と比較されては抗議も出し兼ねまじき現代に於ては、最早や蛇としての魔性を失ひかけて来たのか、近來は大蛇話も餘り話されなくなつて来てゐます。

二二二 十石の大杉の話

昔、殿様が御城を築くことになつて、村々に役人を遣し巨木を探してゐました。其頃御明神村の志戸前と言ふ所に、雲を突くやうな大杉があり、夕陽の頃になると雫石郷半分がその日影になると言ふ素晴らしい大きい杉でありました。是ばかりは姥杉で神木としてゐる木でありますから切られませんが、せんと役人共は殿様に申上げましたが、聞入れがないので樵夫をやつて是を伐りにかかりました。

不思議なことには、前の日に斧で切つたその木片こっけが翌日になるとも通りになつてゐました。其所で評議の結果毎日切つただけ焼くことと致し段々切り進めて、切倒す前の晩には不思議にその木が鳴咽するやうな聲がしたと言ひます。山谷が鳴動するやうな地響を立てて倒れた木を、二十三尋半に切り詰めまして、今度は大變な人足を督して志戸前川・瀧川・雫石川と川下げて参りました。

雫石町の西南、釜淵(一名根堀淵)まで来ると突然沈んでしまつたと言ふことです。人々は困つてしまひましたが、すると眞夜半になつて獨りで浮び出し、流れ出したと言ひます。見ると若い女がその巨木の上に乗つてキワリを唄つて流してゐました。そして次の淵に沈みました。斯様に晝間は沈んでしまつて一切見えない巨木は、眞夜半の丑滿刻になると再びぼつかり浮び上り、例の通り若い女がその木の上に乗つてキワリ歌をかけ流してゐます。斯くして七日目に北之浦と言ふ所のマナイタの淵に沈んだきり再び且つ永久に浮ばなかつたと言ふ神秘的な傳説があります。

この姥杉を伐出しに要した食料米は十石であつたと言ふので、今でも十石の地名もあり十石の姥杉と言へば誰知らぬ人もない程有名な話であります。十石にはその姥杉の伐株やつかが先年まで残つてゐたのを或老人が知つてゐたなどと言ふ話もありますが、得て傳説を實證したがる老人等の悪い癖の一例でありませう。

如何に大きな巨木であつたかと言ふ話は、十石じゅうごくの山より二里以上三里も下流にまでその杉の影がさしたと言つて、杉ヶ崎の地名と部落があります。杉の影の先端がそこ迄届いたと言つてゐます。是は御所村大字安庭字杉ヶ崎であります。それから御明神村北村に杉屋敷がありまして、十石の山から一里許り下流であります。この杉屋敷は十石の杉が倒れた時その枝が地に突刺さつて生ひつき、それが又巨木となつて先年まであつたとも言ひます。或は十石の姥杉の倒れた時そのウラがそこ迄届いたとも、枝の一部が流れて来て生ひついて巨木になつて先年まであつたとも言ひます。斯のやうな傳説に年代を入れて考へることは非常に危険であり、且つなす可きことではありませんが、只十石の山からその川岸を辿つて杉の巨木の傳説が流布してゐることは注意されます。北之浦のマナイタの淵附近は雫石川の最も屈曲奔流して神祕境を作つてゐます處で、其所の淵の主ぬしと潜水の名人との話は更に面白いものがあります。

二二二 水無の話

岩手郡御明神村に天川てんがわと言ふ部落があります。其所の側を流れてゐる川は赤澤川と言ひますが、その赤澤川に「水無し」と言つてゐる場所があつてこの川の水がその場所では地下に潜り込んで下

流に出て浮き出てゐます。

昔、みすぼらしい乞食坊主が廻國して来て、天川に至り、或る民家に立寄り、咽喉が乾いたから少し飲み水を欲しいと告げると、其家の主婦が忙しく機を織つてゐた最中だったので、煩はしさと忙しさから、飲み水がないと叱り追返したのだと言ひます。するとその乞食坊主は「ハハハ此所は水無しだナ」と言つて杖を其所に突刺して去つたので、以後水がここに出なくなつたと傳へ、その杖の木は巨木となつてゐると言はれ、その坊主は弘法大師であつたと傳承されてゐます。

二二三 牛形金塊の話

御明神村の赤澤山は金山として有名でありましたが、その發見や廢坑については次の傳説があります。

赤澤に貧乏ながらも正直な百姓夫婦がりましたが、或る年の春、ミヅを取つて町(雫石町とも)に賣りに出て、そのミヅを賣つた所が、買った人がこのミヅはどこで採つて來たと申すので赤澤で取つて來たと云ふと、この根もとについてゐる光る砂が其所にあるかと問はれてその砂なら澤山ありますと答へたのださうです。

是が赤澤金山の發見で、非常に旺んになり一日九萬兩づつ出たと傳へます。赤澤金山の旺な頃、そのため富豪になつたと言ふ「長者屋敷」があり、長者窪糠塚森の地名があります。

それが廢坑になるには、坑内に牛の形をした金塊が出て、その金塊を引出さうと綱を懸けて曳き動かさうとすると、若い女が出て来てキワリ唄をかけると忽ち坑道が潰れて人夫が壓死するやうになり段々衰微してしまつたと傳へます。

その若い女は産金を教へたミヅ取り女で、この女は殺されたので、その爵でこの金山は末永く繁昌することは無いと言はれます。

二三四 目標となる古木

御明神村の上和野といふ所の山に御箒山樺と言つてゐる老木があります。昔この木を伐ようとしたら赤い血が流れたと言ふ話があります。以來神木とされ早く芽を出せばその年は豊年、晩く芽を開くと凶作と言はれて來てゐると言ひます。

明治初年頃まで、下久保の觀音堂の境内に種蒔櫻の巨木があつて、山津田方面からも花の咲いた時分に見えてゐたさうですが、花が多いと豊作で、少ないと凶作とされてゐたさうであります。種

蒔櫻とはコブシのことです。

私の家に一本の古い梨の木があつて、カメ梨と自家で呼んでゐますが、村人は飢餓梨と言つて呼んでゐます、特に不作の年には多く梨がなるからだと言はれます。

志戸前荒澤の志賀倉から來る雪崩は向ひ山の山腹に達するので有名でありました。其所に一本の栃の古木があつて大雪崩があるとその木の根元まで達すると言ふ話を祖父達から傳へてゐました。

二三五 山で知る天氣豫測

東天に雲はあつて朝曉するとその日は曇る。

朝やけすると曇るか又は降り出す。

栃ころばし(キツツキ)は來ると荒れる前兆である。

嶽が風で遠鳴りすると天氣が變る。

身體がだるく感ずると荒れる前兆である。

朝霜が強いと「霜ぐれる」とて天氣は變る。

寒中おつとりと温い日は近く雪の降る前兆。

逆風（のぼり風）だと近く變天する前兆である。
 小舎の中が煙たいと天氣が變る前兆である。
 川瀬が遠鳴して來ると近く變天する。
 雪解頃シバレルと明日は天氣である。
 西風が吹いて居れば明日は天氣である。
 鼻糞はコピル時は天氣は續く。
 ヒビ（アカギレ）が痛いとき明日も天氣である。
 雪はハシラグと明日は天氣である。
 夕曉すると明日は天氣である。
 星が冴えると明日は天氣である。
 雪がハシラグと猶ほ風は續く。

二二二六 岩手登山のこと

岩手山は東北第二の高山であり、火山としては重複火山としての典型的なものであり、山嶽神と

してはこの地方の住民から厚い崇敬を受けて來てゐます。随つて従來は登山即ちオヤマガケの出來ないものは一人前と見做されない風がありました。女人禁制でありましたために婦人の登山は許されなかつたが、山嶽信仰からこの地方全體の鎮守として尊崇され、出羽の羽黒山等と同じやうに、其信仰の根源には陸羽古代の民衆の總意が含まれてゐて、特異の信仰神をなしてゐたであらう節々は領かれるやうにも考へられますが、それは又別の機會に考察して見たいと思ひます。

五穀を守護するとしては、岩手山の守札や祈禱札と共に峯のはひ松の小枝を取つて來て田や畑に祀つて置き隣家親類にも分配しますが、是は又虫害を豫防する意味ばかりでなく、その耕地を守護する意味が多分に含まれてゐるのでありませう。

麓の新山では祭りの日は庶人群集し、騎馬して參詣する風も多く、山近い部落の人達は「山見」「野懸」の意味を含めて一日の行樂をするなど、多くの民俗が遺存して居ります。

岩手山の中腹に雲が横に棚引けば、

「オヤマ帯した雨が降る」

と言ひ、頂上近くかかれば

「オヤマ鉢巻した天氣になる」

と言ひ、岩手山が判然はつきり近く見えると、

「山は近く見える荒日は来るぞ」

と言ふことや、岩手山に三度積雪あれば次は里まで來ると信じてゐることも軽いながら見方に依つて面白いことでもあります。

二三七 岩手登山祈禱詞

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子ノ一時禮拜。

南無正一位岩鷲權現之メノ峯は三十六童子大宮本社は三所ノ權現田村明神能氣ノ皇子一時ニ御本尊荒ハバキ一時禮拜。

南無東方淨瑠璃世界爲王善定日光月光十二大願十二神所藥師瑠璃光如來七千夜又爲法願力通法皆罪海在所消かゝしし精淨一時禮拜。

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子ノ南無大悲ノ清水權現一時禮拜。

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子の南無大悲ノ不動明王一時禮拜。

南無上り夜又下り明劍王子眷族若王子南無大悲三所ノ權現一時禮拜。笠詰權現。

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子ノ南無大悲の御瀧の明神一時禮拜。

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子ノ南無大悲虚空藏明王一時禮拜。

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子ノ南無大悲の新山權現一時禮拜。

南無熊野は日本第一大權現ケンシヤ籠り夜又ゆや三所の權現若一王子若王子一萬ノ眷族十萬ノ金剛童子ノサンギサンゲ六根罪消前罪消前罪ごく一時ニ消滅しりて信實宿願皆了満足一時禮拜。

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子ノ南無大悲ノ天照大神一時禮拜。

南無大悲の新山大權やねた八幡大菩薩オシメ八大金剛童子ノ一時禮拜。

南無大悲の日山鳥海羽黒は三所ノ權現オシメ八大金剛童子ノ一時禮拜。

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子ノ早池峯權現一時禮拜。

南無歸命頂禮サンギサンゲ六根罪消オシメ八大金剛童子ノ姫神權現一時禮拜。

南無大悲諸神諸佛諸大權現諸菩薩オシメ八大金剛童子ノ一時禮拜。

嘉永六歲癸丑歲五月廿七日岩鷲山大權現參詣仕候

田中林太郎

此祈禱詞をオガミと言つてゐます。今は殆ど聞くことが無くなりました。

〔二〕

二三八 鳥獸も又懐かしい

里山深山に限らず、狼のやうな兇暴な獸を除けば、大抵山村の民衆から嫌はれながら猶ほ親まれる傾向を持つてゐまして、若し假りに山村に是等の獸が居ないとしたら、却つて殺風景な寂しさが農村を山村を襲ふことでありませう。

狼などは随分物凄^{こゝろ}い晩などに、氣味の悪い聲態をして遠吠えなどとすると、身の毛が逆立つ程恐怖してゐる人々も、藪の陰から時には突然に驚かされる雉子の羽音や啼聲は、矢張り懐かし味を覺える程に彼等は山村の生活を味つて來てゐるのであります。狩人は雉子笛を吹いて雉子を近寄せるその技術も、山と親んで來た對人間の歴史又は心理を幾分でも味ふ可きものではありますまいか。

雉石郷の四周の里山には、笹森には「サヨ子」と言ふ狐、籬野には「マン子」、高前田には「クロ子」と言ふ古い白い狐がそれ／＼繩張りをしてゐて人をだますと言はれて來てゐます。

「高前田タロ子に、笹森サヨ子、籬マン子にだまされナ」

一つの童謡呼びかけ詞にもなつてゐて、數多い山村の不思議な物語り、悲しい物語り、面白可笑な物語り、と種々雑多な形式からしてその中に多くの動物の話も、精魂のある説話として、祖母から母から姉から傳へられて來てゐるのであります。併しここでは説話を離れて事實の話を書いて見ます。

二二九 マスの話

陸中の雉石地方では猿のことをマスと言つてゐます。マシラから出來てゐる語でもありませんか

此の山猿は深山に居て、山小舎生活をしてゐますと、時には此マスの一群を見ることがあります。奥山の人の氣配のない所では楽しく遊んでゐることを遠くから見かけます。昔は人の傍に来て戯れたと老人等が言つてゐました。今日では獵銃でも撃てないやうなクラ等に泊り、嶮山から嶮山に移動するさうで狩人はその道順を先き廻りして待伏せると話してゐます。一體にマスでもシシでもクマでも、習性でもありませんか、其通る場所は略一定してゐるらしいので、狩人は何と言ひますか、私達では「通り地」と呼んでゐました。

二四〇 アヲシシの話

アヲシシとも單にシシとも言ひます。ススと響きます。羚羊のことで、マスと共によくその毛皮を着て居る人を見かけます。鹿の方は「カノシシ」猪をば「ウエノシシ」と言つてゐます。

アヲシシも深山に住み、夏などは熊笹交りの叢林を自由自在に驅けて逃げるがあります。狩人は新らしい足跡を發見すると、狩犬をして追跡させ、犬は發見すると吠立てながら跡について行くので是を邪魔扱ひにし、時々一本の角を振立てて逆襲してゐる内に狩人達が先廻りして撃取るとの事でありました。

昔は澤山取れたでせうが、段々少なくなつて來てゐます。冬などは今も猶ほ山麓の人々はシシの皮を着て出て來るのを澤山見かけます。雫石地方では中鳥屋なかとやの狩人は有名でありました。

二四一 熊 の 話

熊は時とすると秋の頃のこと、畑や田圃に現れますので有名であります。月の輪熊でありまして内地特殊のものとも聞いてゐます。

主として深山に棲んでゐますが、雪が降るやうになると木の空洞やユウギレ（土の裂け目）に入つて冬籠りをし、春になつて出ると申します。山の人々はヒラを拵へて熊を捕ります。勿論今は禁制であります。

熊の性質は鈍でありますから、このヒラに這入つて壓死することは珍らしくなかつたと言ひます。「熊の百背負ひ」と私達の地方では申してゐますが、熊ヒラを作るには、その重みとする木を人間が百背負程積まなければ熊は強いから持上げて逃げて行くとの事から申してゐます。それでも熊の「一力」と言つて一度は必ずもつくりと立上ると言はれてゐます。熊にも矢張り通り地があつて、其通り地にヒラを作るものださうです。

ヒラは下は何の變化もなく安全に通りに行けるやうに見せて、それを通ると忽ち穴に墜ちて壓死する仕懸を言ひます。

熊を捕つた時は、其所に熊の頭をあげ、マツケ（獵人鉈）の模型を供へ熊の神様を祀つて呪文を唱へ嚴かに禮拜して歸る風習があります。熊と格闘した話が澤山あります。昭和八年の夏にも隣村で實際ありました。

二四二 兎捕りの話

兎ワナで兎を捕ることは山小舎生活の一つの楽しみでありました。ワナは輪綱かと思ひますが、今日では針金で作られてゐます。小柴を雪に突き刺して長い桓を作り、所々にこのワナをかけて置きます。

兎は多く夜になつて活動するので、ワナには夜にかかります。毎朝兎ワナを見廻るのは一つの楽しみであります。時間が永く経つと死にますが、未だ生きてゐて逃げようと死物狂いになつてゐるのもありました。

兎が夜出るのは一の習性かと思ひます。兎は月夜を好み亂舞すると言はれますが俗説でありませ

う。晝は鷹を恐怖で隠れがちであります。

夏などは、山の中の畑が夜になつて兎群に襲れることがあり、豆畑などは被害が相當あつた由で、山中の畑に兎除けの垣を作る風があつたと言はれてゐます。

春近い堅雪の頃一同申合せて「兎追ひ」と言ふことをやることがあります。晝にはユウギレや木の切株せんくの下の穴に晝寝をしてゐますので、それを襲ふて捕るとか、勢子で以て追立ててゆきそれを先廻りしてゐる鐵砲組が撃捕るとか、ワラダを投げて捕るとか致します。ワラダと申すのは柴木で以て經一尺二三寸位の輪を作り、それに縦横に繩を張つて更に尾として手拭などをつけます。兎を見かけるとその上を超して投げますので兎は極度に恐れて、忽ち其所の藪などに隠れて出て來ませんから捕へられるのであります。西根村の生れで高橋定藏と言ふ男はこのワラダで兎を捕る名手でありました。

兎はその居た場所から一旦逃げ出しても、再びもとの場所へ戻つて來る習性があるので狐などは兎を追ひ出すと其習性を知つてゐて再び歸つて來るのを待つて捕へ喰ふと言はれてゐます。

猶ほ亦兎ヒラを作つて捕へることもあります。上に重量となる木を積み、下に餌を置いて、忽ち積木が墜ちて壓死する方法であります。

二四三 ウキノシン

猪をウイのシンと申してゐます。往昔はこの獣も時々見えたと言ひますが、慥かな事は分りません。山から野原から田圃をミヨテ（真直）に通らぬける事がままあつたと言ひます。近い頃には捕れた事實がない所を見ると憶測ではなかつたかと思ひますが、昔は事實山傳ひに来て現れてゐたものかも知れません。

二四四 オカベの話

狼のことをオカベと言つてゐます。又はオイヌとも呼びます。深山よりは里山や原野に居たやうでありました。内地の狼は實は山犬だと最近では言はれますが、老人達は必ず居たものだと主張してゐます。明治期になつてからも私の村で馬を狼に喰はれた話が相當あります。放し馬を狼が襲ふと、後脚に喰ひついたりして、次第に泥土の深い谷地濕地へ追込むのださうです。そして一群集つてその馬を生きながら食べてしまふと言ふ兇暴性を有し、人々は極度に恐怖してゐました。

狼は人間や馬を襲ふと、後について歩いて来て、段々頭上を飛び躡えなどして、有名な「狼のチ

ガイ尻」をひつ懸けると、忽ちこのチガイ尻を懸けられたものは目が眩み、首筋などに喰ひ付かれと言ひます。その折り「脇差」とか「キリ刃」を持つてゐれば頭上に立てると狼は腹を裂くとか危険と知つて遠退くかすると言はれます。其のため昔の往來には是非護身用として脇差刀やキリ刃を持つて歩いたとも言はれます。人などはよく山の往來筋で襲はれた話があり、昔の夜の往來は恐いものだつた話が澤山傳へられてゐます。

私の隣りの古館と言つた老人は明治十年頃の軍人ですが、盛岡の歸りに狼につけられて、生きた心地がなかつたと述懐してゐました。夫婦二人で夜になつてから約三里許りの山道を、狼につかれたので、禪と帯を結び合せ後に引づり通したと言はれます。斯うすれば如何に狼でも前に進めないさうであります。昨今は絶滅の状態か殆ど見聞する事がありません。

二四五 狐の話

狐は野原や里山にも居ますが、深山にも這入てゐるやうです。昔は随分ゐたさうで、私の叔父は若い時分家の庭先で狐捕りをしたさうで毎晩十匹位づつ群をなして軒もとまで来てゐたさうです。から多かつたものと思ひます。今も猶ほ里近い山に穴を掘つて棲んでゐます。時々見かけますが氣

持はよくありません。狼のやうに兇暴性ではありませんが、昔から人口に膾炙されてゐる獣でありまして、狐火の話、人が狐に訛だまされた話、狐が化ける話、人が狐つきになつて狂人となる話など私達の地方では人間と澤山の交渉を有してゐる獣であります。狼に次いで嫌はれてゐます。

二四六 バンドリの話

私達の地方ではムササビのことを「バンドリ」と言つてゐます。樹木の空洞などに二匹も三匹もゐて飛び出すことがあります。すると附近の人達は寄つてたかつて追つたりするのは山小舎生活の木伐りの有様で、時ならぬ騒ぎを演じたり致します。樹上からべた／＼と飛び下りては又木の上に乗つて行く山の愛嬌のものであります。素人には仲々捕へ難くあります。狩人達は月夜を選びバンドリ打を致しますが、この獣の習性と見え夜になると穴をぬけ出して旺に活動致しますので、一晩數匹を獵する人も稀ではありませんでした。

バンドリは腋の皮が發達してゐて鳥のやうに樹上から飛び下りたりしますのでトリの名を得てゐることでありませう。

二四七 テンカベの話

私達の地方で言ふテンカベとは貂のことでありませう。テンカベのカベは狼のオホカベのカベと共通する何物かがあるかも知れません。テンカベは谷間の石の洞穴などに棲んでゐます。棲んでゐる所を見つけると山仕事を放り出して岩穴を掘つたりしてワイ／＼騒いでゐたやうなこともあります。高價な小獣ですから捕ると酒を呑んだ事もありました。

二四八 マミの話

穴熊とも言ふさうですが、私達の地方では「マミコ」とも言ひ、臭氣があるとの意味で「クサイコ」とも呼んでゐます。猫位の小さな黒毛の獣であります。洞穴などに棲んでゐます。捕つた事はありませんが、山小舎では買つて食べる事もありました。時とすると里の人家の床下に棲んでゐる事もあります。

二四九 ムジナの話

ムジナはタヌキの事と言ひますが、私達の地方ではムジナとのみ知つてゐます。

ムジナも人をだます獣として有名であります。山小舎生活で聞かせられる珍らしい話は多くムジナの話であります。夜中に木を伐る音を響かせて四五日すると今度はウケを伐つてガリ／＼と倒す眞似をすると言はれます。毎晩々々鋸引きの響きをさせ、三四晩鋸引きをしたかと思ふとカチリカチリとウケを伐り地響をさせるやうな音を立てて倒す音を聞かせるさうで、随分巧みであると誰でもが申してゐます。向ひ山に居るやうでも實は小舎の側に來て悪戯をしてゐると申します。山の生活の愛嬌ものの一つで「ケツな畜生だ」と憤慨し乍らも常のこととして恐もしなかつたやうであります。

「今夜もムジナの畜生が來て悪戯をする、一つおどかしてやる」

等と血氣のもの達は、火の燃えるキノシリを持つて戸外に出で、やにはにその邊に投げてやると三晩四晩は來ないこともありますが、次に來ると皆寢靜つた時分を見計ひ、小舎をゆすぶることもあつたさうです。そんな晩の翌朝は小舎の周圍はムジナの足跡が一ぱいついてゐたものださうであります。晝間は意氣地がないので谷間の洞穴などに隠れて、夜になると、のこ／＼出て悪戯をするので、厄介がられてゐたと言ひますが、性質は兇暴性がなく鈍でありますから、一面は單調な山の徒然を慰める話題の提供者として面白がられてゐたやうであります。

二五〇 雉子の話

雉や山どりを捕るにもワナを用ゐる事があります。私達の地方では「山キジ」・「里キジ」に區別して呼んでゐます。里キジの雄鳥は夜飛ぶと光ると言はれますが、月夜など月の光りを反射する意味でもありませうか。昔は妖怪的な魔性を有し、人々が恐怖した話もあります。「猫は古りて化叉となり、猿は古りてヒヒとなり、雉が古りて鬼人となる」などと譯の分らぬことを言ひ、キジも人を毒する魔性の所有者であると恐怖もされてゐたやうであります。巨鳥と化性して人に禍するものとの考へがあつたやうであります。

キジワナは濕地などに作り、四方を圍み、中に寄生木や茨の實などを置いて誘ひ、糸の繩のワナを用ゐます。

又「雉追ひ」をも致しました。十二日は山の神の祀り日ですが、此日雉は山の神に羽を結はれてゐると傳へられ、天氣さへよければ里の山では雉追ひが旺でありました。十一月二十四日の御太子箸を懷に入れて雉追ひをしないと必ず捕れると言はれ、私達の少年の頃この箸を懷中して終日里山を駆け廻り、腹を減らしてゐたこともまゝありました。

雉追ひは團體的で、十人二十人の青年が集つて、手分けをして雉を追出し、これを手捕りする事があります。諸所の要所／＼に「遠見」と言ふ者を配置し、勢子が甲點から雉を發見してワアと関の聲をあげて追出すと、雉は驚いて遠く七八丁も一舉に飛び乙點に向ひます、乙點の勢子は又ワアと関をあげて追ひ返すか、遠見の指圖で探し出して追返すので、三回位追はれると雪の上に落ちて三十分位は動かずに居るのでそれを手捕りに致します。固い雪の上に新らしい雪が五寸位積つて、後は晴れるとよく雉追ひが始められたものであります。昔は幾十羽も捕れたさうですが、私達の時代には多くて七八羽、全く失敗のこともありました。獵銃の技術の進んだ今日では雉追ひの行事も殆ど見られません。

山村ではキジも兎や山鳩と共に農作物を荒すので嫌はれてゐました。山鳩は蒔たての豆畑に来て、二葉となつて地上に現れた頃の若芽を缺くので憎まれ、兎は段々成長した豆の葉や枝を食べるので嫌はれ、雉子は秋の頃の實入の蕎麥畑や粟畑や稗畑を荒すので嫌はれ憎まれてゐます。兎などは垣を繞らして防ぎますが、雉子の類は飛び込むので始末に困るのであります。私達の地方の民謡に子守唄の一種として次の唄が残つてゐます。

ホヤラ島に鳩おりた

鳩は八幡豆かぐ

雉子はゲンごとく

ごとく／＼虫は皆喰らうた。

ホヤラー・ホヤラー。

ホウイ／＼。

豆缺くは生ひ立ての二葉を折り缺くこと、ゲンゴト／＼のゲンは、雉子の啼き聲、ゴト／＼は逃げて飛ぶ羽音。ゴド／＼虫は罵言である畜生と言つたやうな意味、ホヤラもホイも追立の詞であります。

二五一 柄コロバシの話

キツツキ(啄木鳥)を私達の地方ではテラツツキと呼んでゐますが、山ではトチコロバシと言つてゐました。天氣續きであつた後に、嶽の遠鳴りも止んで、どんよりした夕方や、静かな朝まできなど、林の中からコンコンコン／＼と木の幹を打叩く鳥の音が聞えて來ます。

「柄ころばしは來た、雨降りが前兆ぞ」

この鳥が幹を叩いて廻るやうになると雪降りや雨降りが来ると信じられてゐました。

二五二一 ゲンベツ

山中の川や澤目には、飛沫を飛び躡え／＼して、ゲンベツと言ふ黒い鳥が活潑に飛んでゐます。「川くま」と言ふ鳥であります。ゲンベツは少し位は泳ぐ鳥であつて、小魚を捕つて喰つてゐるやうであります。

此鳥を黒焼とした薬は、産婦の妙薬として珍重される風があります。山の中で柴で叩いて捕つたりしますが、矢張り山中の單調を暫し消す一の行樂であります。

〔三〕

二五三二 カ (蚋)

私達のカと稱するのは蚋(ぶよ)といふものらしいですが、私達の地方では是を三種に區別して呼んでゐます。春、山中で早く出るのは大きいので「雀蚋」と呼び、非常に小さい體でありながら

痛く感ずる「糠蚋」と普通の「蚋」であります。

夏分はこの蚋が多いので山村の人々はこの蚋の食ひ痕で手首や足首を眞黒くしてゐます。従つて曇天の日に田畑で仕事するとこの蚋群に猛烈な襲撃を受けるので、「糠燻」を作つて鉢巻にするとか腰に差すとかして作業を致します。カユブシは蓬を刈つて乾して置いたものにぼろ切れを入れて繩に作つたものや、麥・藁・蕎麥などの殻や檜の皮を揉んで作つたものなど様々あります。雀蚋は山林などにゐる體の少し大きい方で、この蚋に喰はれると非常に腫れ上つて其局部に膿を持つことがあります。山中にゐて毒蛇を吸つたり、腐れた獸を吸つた口で人間の肌を吸ふから、その毒を感染させて斯くなると信じられてゐます。此の蚋の特徴は人の顔殊に眼を襲つて来て五月蠅いのであります。又糠蚋は、眼に入れても苦しくない程小さい體でありながらチリ／＼と痛く吸ひつくので非常に痛痒を感ずります。荒い布目などは平氣で潜り肌をさします。

二五四 ヨガ (夜蚊)

私達のヨガは藪蚊のことでありませう。蚊帳の外にクン／＼呻つてゐる蚊のことです。主として夕方から夜にかけて人を襲ふて來ます。其故に各戸毎に夕方になるとヨガ燻といふことをや

り、家中を煙で立籠めさせ、蚊を外に追出すと同時に入れない意味で毎晩やつてゐます。この蚊は山林中にも少しは居ます。

二五五 トシバイ

蠅と同じ位の大きさで、翼に斑點があります。夏季の林野で猛烈に人馬を襲撃して來ます。バイはハイ即ち蠅でありませう。

二五六 ウシバイ

蠅と區別がつかない程よく似てゐます。トシバイのやうに鈍性でなく、非常に鋭敏であつて其立廻りは憎らしい程です。トシバイより痛く喰ひつきます。ウシバイは牛蠅でせう。

二五七 ハチアブ

多く森林や原野にゐます。盛夏の頃には場所に依つて往來が出來ない程であります。岩手郡御所

村南畑地方では家の中にあつても晝食中は蚊帳を釣つて食事を取る程多いので有名であります。

岩手郡と和賀郡の堺の山伏峠は、昔このアブ群に襲はれて山伏が死んだと言ふ話を傳へてゐる程有名であります。

ハチアブは馬刺うまさしとも言はれるさうですが、五六種に區別出來るやうであつても、一樣にハチアブとだけ言つて、私達の地方では區別してゐないやうであります。このアブ群の襲撃を受けると呼吸もされず眼も開かれない程だと言ひます。私の経験から言つても、全く肌の露出を無くし、顔にヴェールを施さねばならぬ程であります。山の生活に冬季の選ばれる一因でもありませう。

第十二 山林と食物

〔一〕青物類

二五八 コゴミ (クサツテツと言ふ由)

春最も早く食べられるもので、山の谷間などに群生してゐます。まだ若い螺旋状になつてゐる頃取つて来て其儘煮ても食べますが、おひたしや合物としても美味しく、又煮て干物として年中食べられます。

二五九 バツケア

落の藁のことで、煮て合物にします、早春の山の食物であります、少し苦味があります。

二六〇 ゼンマイ

一度煮てからでなければ食べられません。おひたし合物或は干物として年中食べます。コゴミは其儘汁に入れて煮て食べられるので、斯ふいふ類を「煮込」が出来ると言ひ、ゼンマイのやうに一度煮て澁味苦味を除いてから食べられるものと、即ち「ニゴミ」の出来ないものとあります。ゼンマイも山の斜面等に群生してゐます。その若い螺旋形をしてゐるうちだけ食べられます。

二六一 シドケ (もみざがき)

煮込も出来ませんが、多くはおひたし又は漬物と致します。山の澤目などに群生してゐます。葉が開くやうになると食べます。

二六二 ホンナ

煮込に出来ません。一度煮出してからおひたし又は漬物と致します。臭いので餘り賞用されませんが、シドケと同じやうに取扱はれます。群生はしてゐません。同じく若い折だけ食べます。

二六三 アイコ (しら〜くた)

煮込に出来ず。シドケと同じ位に賞用されます。葉の開かない若い所だけ食べます。甘く美味であります。合物おひたしと致します。叢株になつて生へてゐます。成長すれば皮をとりその皮から繊維をとり布に織ることもあります。

二六四 ウ ド

煮込とも致します。生の儘酸物とも致しますが、多く煮てから合物などに致します。葉の開かない若い所だけ食べます。山には群生の性質を以て土の崩れてゐる上に生へてゐます。

二六五 ホ ギ (蔭)

春の若い時だけ食べます。煮込とは致しません。合物おひたし漬物などに致します。山中の谷間に群生してゐます。

二六六 ミ ツ

春から秋まで食べられます。煮込としても・合物・漬物・おひたし・ミツトロロ・ゆくとして可

ならざるはない程であります。山中の湿地に群生してゐます。

二六七 ウ リ エ (ぎぼうし)

春に若い時だけ食べます。煮込としても、合物・おひたし・漬物等にして食ひ、山中では群生してゐます。

二六八 ア ザ ミ

奥山より里近い所でも出ます。煮込としての汁は賞用され、合物などにも作ります。春の若い時だけ食べられます。

この他深い山では竹の子やショデコ、カタクリの若葉、マサビ、木の芽ではタナボの芽などありまして總稱して春のアヲモノと言つてゐます。里山ではワラビやノノバ・セリ・ミツバ・コメの木
の芽・ウコギの芽・アサヅキ・ノビロコ・ニラ・其他ヤマイモ・ヤマホド・トゴロ・アマドコロ・
ユリなどがあります。

〔二〕 秋のもの

二六九 ア キ ビ

キアキビ紫アキビの二種に區別されてゐます。紫アキビは里近い山中に多くあつて食用として賞用されます。キアキビの方は野原に多くありまして少しく下品とされてゐます。口が空いたものを其儘とつて食べるだけで貯蔵はしません。

二七〇 山 葡 萄

山葡萄は最も喜ばれます。甕に入れて置くと獨りで發酵し葡萄酒が出来ます。

里山には「ノハラ葡萄」と「サナヅラ葡萄」があります。何れも粒が少さく山葡萄に比し下品とされてゐます。

二七一 栗 の 實

翌春まで貯蔵してゐて食べることもあります。是を食べると人は丈夫になると言はれてゐます。深山には栗の木はありません。

二七二 ハ シ バ ミ

生で食べ且つ干物ともします。

二七三 コ ウ ガ

シラクチの果實で、多く食べると酸味で舌が裂けると言はれてゐました。

二七四 ク ル ビ の 實

私達の地方では貴重にしてゐて、心臓強壯剤の如く言はれてゐます。餅に使用する他は産婦に食べさせたりします。

〔三〕 茸 類

二七五 ワ カ イ

春から秋の頃まで出ます。直ぐ煮込として食べても美味くあります。柄びくがなく木の枯れた所に半月形に生へます。里にも山奥にもあります。桑、コンゴウ、ヤス等に生へます。

二七六 ス エ ダ ケ

春から秋の頃まで出て、吸物としてその香気がよいので天下周知のきのこであります。

二七七 松 ダ ケ

秋が近くなつてから出ます、柄びくが大きく松林の下の土に生へます、是も皆に知られてゐる有名なきのこであります。

二七八 サ マ ツ ダ ケ

松の木の枯れた所に生へるきのこで、全體白色を呈し少し赤黄色をさして見えます。柄びくがありますが群生はないやうです。松ダケに次ぐ美味と言はれてゐます。

二七九 ハ ツ タ ケ

野原の松林に生へることは皆承知のことです。柄びくが短かく仲々美味として賞用されてゐます。

二八〇 土つち モ ク リ

野原の林などで白い大きなきのこが土を持上げてゐるのはこのきのこで、一度煮出してから食べますが、土臭いとされてゐます。

二八一 トウジモダシ

松林などに笠が小さく柄の長い紫色がかつただい／＼色のきのこであります、乾して置いても又煮込としても食べられます。

二八二 アワモダシ

初茸の生へる場所なら必ずあるきのこで、群生であり笠の下目は綱目になつてゐます。煮込みとすれば黒くなり汁はどろ／＼ねばります。一度煮出して漬けて保存もします。

二八三 エグジ

アワモダシと殆ど似てゐますが、若い小さいもののみを食べますが、食用と思つてゐません、アワモダシと併行して生へてゐます。

二八四 カヤシメジ

萱の根元など林の中に生へて群生してゐます。全體白灰色に見えます。煮込として美味しくあります。

二八五 ヤチキノコ

谷地湿地に好んで生へるきのこで柄が長く薄だい／＼色を呈し煮込として賞用されます。

二八六 サモダシ

一名をクネモダシとも言ひます。雑木の切株の腐れかかつたものなどに群生してゐます。煮込みとして仲々美味しくあります。

二八七 アカボリ

枯れた雑木の切株になど雪の降る頃生へる赤味を帯びたきのこであります。煮込として美味しくあります。木の株が見えぬ程群生する事はサモダシと同じであります。

二八八 シロボリ

山の林の中に生へます。萱シメジの色を呈してゐます。煮込としてもよし、煮て鹽漬ともして保

存も致します。

二八九 白シメジ

萱シメジの色を呈し、柄が太く長く、林の中に生へます。煮込として非常に美味しく賞用されます。又乾して保存する事もあります。

二九〇 紫シメジ

笠の下の目が少しく紫色を呈してゐます。山の林の中に群をなして生へてゐます。一度煮出して食べます。

二九一 ウイコモダシ

一名をアヅキモダシとも言ひます。細い柄で塊りをなして生へてゐます。煮込汁物として殊のほか賞用されます。色は白灰色。

二九二 ハキモダシ

恰も箒の形をしてゐるのでこの名があります。だいくがかつた黄色のきのこで、太い大きな柄から房々と箒のやうに出てゐます。山の林の中に生へます。一度煮てから合物にします。

二九三 バクロ

里近い山の林の中に列をなして生へてゐる鳶色のきのこで、太い柄と大きな笠は茸の類で最大を誇り得るものでありませう。笠の下の目は、細く裂けた目でもなく網目でもなく毛状をなした房で出来てゐます。乾かして保存し、後に食べます。カワダケとも言ふさうです。

二九四 マイダケ

栗マイダケ、楢マイダケなどあります。一つの大きな柄から枝を出してゐて、一個五六貫目のももあると言はれ、茸類では一番大きいものであります。昔西根村から殿様に献上したものは二人で擔ぐ程の大物であつたといふ傳へがあります。栗楢などの巨木の根元に生へます。乾して保存し

後に食べます。

二九五 ム キ ダ ケ

奥山の枯木に群をなして生へてゐる半月形の茸であります。柄がありません。煮て鹽漬として保存もすれば煮込としても食べます。

二九六 カ ノ ガ

奥山の枯木に群をなして生へる半月形のきのこであります。笠の下は毛状をなして房のやうであります。全體白く見えます。一度煮出して合物又は漬物として保存致します。

二九七 ナ メ ジ シ キ

奥山の枯木の倒れてゐる木に群をなして生へる赤みがかつたきのこであります。煮込としても食べ、煮て漬物とも致します。

二九八 ユ キ ノ シ タ

野原林などに初冬の頃まで生へる小さなきのこであります。煮込として食べます。

二九九 キ ン ダ ケ

赤いきのこださうですが詳しく知りません。

三〇〇 ギ ン ダ ケ

これも名ばかり知つて實物を知りません。

三〇一 キ ク ラ ゲ

ゆらくしたものであります。乾して保存し佛事するときなどに使用致します。枯木などについて

三〇二 ヤナギモダス。アガキノコ。

柳スイダケとも言ひ主として柳等に生へます。一度煮て食べます。山のブナにも生えます。アガキノコは里の山林に群をなして生へます。一度煮出して漬物として食べてゐます。

生はぬ

第十三 山は未知數

三〇三 産金と山村社會

陸奥の國と謂へば黄金と金山を聯想する程歴史の上では輝いてゐますが、日本産金史上に於ける奥州は遺憾ながら未だ多くの問題に手を觸れずにあります。従つて民俗學方面からも山人や・畿内の商人や・金賣鍛冶屋の類や・地理學的山村の考察や・廢坑趾や木炭焼や他國他郷との關係など郷土の傳承に基いて研究することが多々あります。

紫波郡の志和町の發達は日本の經濟史學者の間に久しい間疑問とされた話がありますが、參聚村落と見る可きこの山村に、市場的一中心の民家が集成して一の町場を形成してゐることは、一の奇態なる現象として考へられて來ました。殊に近世盛岡藩に取入つて一藩の經濟を掌握して居た近江商人の一家がこの志和町に居ることも頗る解し難い謎でありました。併しながら最近に至つて史學地理學民俗學からして段々にこの不解の謎も解さる可き機運の仄かなながらも見え出して來たこと

は幸ひであります。山の民俗の考査が追ひ／＼役立つて来た一證であります。

志和町の後方に山王海さんのかいと言ふ部落があります。縣下避在の土地として、又頗る古俗を保持する山村として有名であります。其後方は鍵掛峠を経て雫石郷の内、南畑と交際してゐます。この村は嘗つて炭焼を渡世として暮して来たとの傳承を有してゐる程、農作的物資には恵まれない村であります。

天正六年斯波郡の領主斯波詮直は南部信直と戦ひ敗れて、稻荷成就院に逃げ、更にこの山王海に匿れ、後には秋田方面に隠れたことが見えるから、山王海から雫石の南畑に出て後秋田に出たものと考へられます。山王海は炭焼渡世であつた事は一面金山鑛山を考へさせられます。この地に金山澤の地名も遺つてゐましてその昔鑛山のあつた事は領れますが、するとこの下の志和町も一の黄金文化の名残りであり、其當時の殷賑を極めた一市場であることが察せられます。平泉藤原氏は平泉に豪華な文化地を建設し、更に北部に小平泉の觀ある樋爪（後の日詰）を創設した事も、足利氏の分族の斯波氏は奥州管領の裔として郡山（月詰）に居た事も領かれ、其背後には經濟關係と信仰を中心とする志和町と稻荷神があり、其所に畿内商人が根を下すのは自然の成行きでもあらうかと思はれます。近江商人の村井が志和町に來たのは藩政初期であり、同地の砂金採取を目的としたもの

であります。

東北では木樵其他、山に入つて働く者をヤマゴと言つてゐることは事實であります。中國では特に鑛山の労働者だけに限つて居たと言はれる（柳田氏山村語彙）ことは面白いことと考へられます。實は炭焼きも木樵もヤマゴであり山人（やまびと）であつて然る可きことで、或時代には炭焼き木樵は鑛山労働者であつた事に不思議はありません。雫石地方でも赤澤金山の旺んな頃は、山の中に炭焼く家が立竝んで、町が出来たとか稱する所があります。従つて鑛山と炭焼きは不可避的のものであります。同時に鍛冶屋は又産金と不可避的のものであります。鍛冶屋敷鍛冶場の山方にあるのも注意されます。鍛冶と金物屋が更に金賣商人と不可避的のものでありませう。畿内から入つた商人には夙に奥羽の産金事業に目をつけて、後には大きな産を成し、地方の財界を牛耳り、更に大小名を屈服せしめるやうな財閥を作つて行つたことも自然の経路で、中世以降根を地方に張つた近江商人の一派などはその尤なるものであります。

舊藩時代志和三萬石と言はれた雫石川の上水は、其穴口の工事に於て上方（かみがた）から來た六十六部（僧躰の人）の指揮でサル岩を焼き通したと言ふことも、一面強烈な信仰を把持して地方に入り込んで來た畿内商人であり、それが亦鍛冶屋鑛山師の部屬であつた事が想像されるのであります。志和町

を中心として稻荷信仰のあるのも、斯うした有力な利財的な信仰團體により、一面は地方の物資を商品とし、一面は畿内文化を將來して地方の開発に盡し、其間の利慾的關係と繩張り區域とが相錯綜して表面に於ては豪族同志の衝突と、榮枯限りなき没落の歴史を繰返し、豪族の没落と同時にそれに依つて根を張つてゐたその系統の信仰團が、寺院が勢力を失墜してゐるのであります。

地方の豪族が、殊に山伏修験の徒と提携してゐた這般の事情も臆氣ながら察せられるのであります。

諸國を流浪する信仰團體の一味のものは、或はそれより分派したものである中には、高遠な理想や修業潔濟とは別途の目的のため、山野を旅の枕として居た者もあつた事と考へられ、それが地方の信仰分野に時代的な著しい色分けのあることを承認させられるのであります。

是を要するに産金の歴史には、山の民俗から出發して鋏を打込む可き畑が極めて多く、それが土地の經濟の沿革に著しい變化を來して居り、郷土の文化史を知るに是非とも考へて見ねばならぬ事と存じます。

三〇四 童謠花折り

友だち^ナ友だち^ナ

花^コ折りに御出^{アイデ}御座い

なに花折りに

櫻花折りに

一本折てはひつ擔ぎ

二本折ては引かつぎ

三本目に日は暮れて

蕎麥うつ小舎さ

宿とつて泊つて

朝まに起きて見たれば

曰のやうな女郎と

杵のやうな兄^{アイナ}と

天目盃とり出して

一杯參 客どの

二杯參 容どの

俺等方の肴は

高い山の竹の子

低い山のひつこのこ

ひつこと貝ひあんと蛤貝コと

土間にはで踊る小雀

チリンポロンとお飛んだ。

この童謡は私の幼ない頃さかんに唱つた唄であり、その昔から傳へられて來た幼年者の唄でありました。何時との季節もなく唱歌にも似た節廻しで唱ひますが、山村の童謡としては相應しいもののやうに思はれるので、茲に採録致します。

三〇五 山見又は花見のこと

私達の地方では春の四月一日（陰曆）をヤマミ・又はハナミと稱して一日業を休み外に出て遊び且つ飲食を致します。この行事は全國と言ひますが、本來は花を賞玩する遊山的花見ではなく、

其以外の深い意味のあることと存じます。山に出ると言ふ事は主眼であり、村中學つて行樂を共にする行事であり、野遊び山遊びでありますから、里近い山に登つて或る行をすることに意味はあり、且つ信仰的な祈りの流れであることが察しられます。當日は持參した飲食物を互に御馳走し合ひます。

跋言

拙著「山の生活」は、昭和三年の秋少し書いてあつた手記へ、同五年の春又少し書き足して、本山桂川氏の日本民俗研究会から発行されたのでありました。是には佐々木喜善氏の御力添がありました。

この小著を柳田先生が推賞下されて、佐々木彦一郎氏や早川孝太郎氏等の方々も知人に紹介し下されたり、そんな事から再びこの小著を出して見ようと決心するやうになりました。

日本民俗研究会の方にも品切れとなり、私の所蔵本の幾部を差上げたり、それから昭和七年の末に郷土研究社の岡村千秋氏から出版したい希望を言つて來ましたが、今回一誠社の西村氏の申越に、遂ひ全部の書直しを決定して出版發行することになりました。是には理由はあります。最初本山氏の所から出版した際、既に多くの訂正をする必要があつたので、發刊半ばにして原稿の返送を請ひましたが、多くの遺憾を有ちながらも、詮方ないとして一字一句を訂正せず再び其儘送り戻したのであります。

爾來再刊の機を心に期して居りましたが、今春早川孝太郎氏の御來訪に逢ひ、私の所蔵本全部を岡書院に拂ひ譲り、茲に本書を刊行することとなりました。

特に柳田先生の御力添に依り大日本山林會では存意を寄せられた事は身に餘る光榮でありました。

以上の外拙著「山の生活」に對して讃辭を寄せられた人々及び蔭ながら力を盡して下された先輩知友の方々に心から感謝を申し上げます。

特に今回、柳田先生の指導と序文を得て本書を飾ることを得ました事は無上の欣びであり光榮とする所であります。猶ほ一誠社西村氏の好意を併せて多謝するものであります。

昭和八年九月廿八日

田中喜多美識

昭和八年十一月七日印
昭和八年十一月十三日發

行 刷

(定價金壹圓五十錢)

一誌俗民村山一

著 者 田 中 喜 多 見

發 行 者 東 京 市 麹 町 區 九 段 四 丁 目 八
西 村 豐 吉

發 行 所 東 京 市 麹 町 區 九 段 四 丁 目 八
一 誠 社

報 替 東 京 七 五 九 七 六 番
電 話 九 段 二 五 六 八 番

東 京 市 神 田 區 錦 町 三 丁 目 二 十 五 番 地

印 刷 所 文 成 社 印 刷 所

前 田 宗 松

新版 聽耳草紙

柳田國男先生序
佐々木喜善氏著

定價三圓五十錢
送料二十二錢

日本民俗學論考

中山太郎氏著

定價三圓
送料二十二錢

東北の土俗

柳田國男氏等著
折口信夫

定價一圓五十錢
送料十一錢

歐洲近世外交史(上卷)

法博林毅陸著

定價三圓五十錢
送料二十二錢

歐洲近世外交史(下卷)

法博林毅陸著

定價四圓
送料二十二錢



